学生の主体的学びを促進する授業の取り組み

――CALL 授業での発音指導において――[1)]

竹　田　里　香

要旨

本稿は，CALL1 の 2021 年度及び 2022 年度の春学期のメディア授業（ライブ配信型・オンデマンド型など教員の自由裁量が可能）の授業形態の枠組みを活かした授業の実践報告である。中でも，発音の個別指導と全体指導における学生の主体的学びを促進する授業の取り組みについて中心に述べる。個別指導では，授業後のアンケート結果から，学生は今まで経験がなかった個別での発音指導を高く評価し，自らの発音を意識するようになっていたことが分かった。一方，全体指導では，学生は話し合い活動を中心として「個→グループ→クラス全体」へと知識を共有し，一方，教員は学生がイメージできる達成可能な目標を提示した。こうすることにより，学生の主体性が促進されたと考えられる。また，教員が学生に個に応じた指導をし，フィードバックを与え，できたら褒めることが，学生のやる気を保つのに役立ったと言える。

キーワード：発音指導，話し合い活動，個別指導，フィードバック

目次

1　はじめに
2　CALL1 の授業内容
2.1　授業目標および授業計画
2.2　授業実践
2.2.1　個別指導の実践
2.2.2　全体指導の実践
2.2.3　プロソディー指導の実践
3　本授業に対する質問紙調査
3.1　質問紙の概要
3.2　質問紙への回答結果
3.2.1　選択式質問項目への回答結果
3.2.2　自由記述式質問項目への回答結果
4　おわりに

1　はじめに

英語と日本語では言語間差が大きいため，音･文法･文字すべてにおいて，両母語話者には習得しづらい言語となっている（成田，2013）。また，日本語母語話者が英語を発音する際に，不要な母音の添加や，抑揚なく発話するなどの母語干渉が起こることが知られている。発音には，音の最小単位としての母音や子音などの分節音と，単語・句・文など全体にかかわるストレス・リズム・イントネーションといった超分節音的特徴がある。一般的に，分節音に比べ，超分節音的特徴に関する発音指導は難しいとされているが，両者とも車の両輪として重要である。

日本の英語教育において，発音指導にはそれほど重点が置かれてこなかったが（成田，2013），英語学習者は，両

言語の音に対する特徴を認知し，正しい発音を心がけることでスピーキング力だけでなく，リスニング力も伸ばすことができる。ここでいう正しい発音とは，いわゆるイギリス英語やアメリカ英語の発音の完璧な模倣ということではなく，調音方法を意識した，一定の規範に準拠した発音のことである。英語学習者が日本語と英語の音に関する特徴を知ると同時に，その調音方法を学び，何度も繰り返し発音練習することが正しい発音習得の鍵となる。例えば，*th* の無声音 / θ / を発音するときに，日本語の「サ行」の子音 /s/ ではなく，舌先を上下の前歯の間に挿入し，細くするどく息を出すと無声音　/ θ / が上手く発音することができる。例えば，学生は自分では舌先を出しているつもりでもほとんど出ていないことが多い。教員はその点を指摘し，見本を示し，学生が体得できるまで何度も指導することが大事である。

さらには，グローバル化が進む中，英語で発表をする機会がますます増え，発表内容が重要であることは言うまでもないが，発音を少し意識するだけで伝わりやすくなると考えられる。つまり，教員がふだんの授業の中で，効率的に発音指導の機会を増やすことで，効果的な英語教育が可能になると考える。

2　CALL1 の授業内容

2.1　授業目標および授業計画

CALL1 の授業目標は，①理解可能な英語の母音と子音を発音することができる，②適切なイントネーションで英文を読むことができる，③ワードやパワーポイントスライドが作成できる，④指定されたフォーマットで短いエッセイやレポートを書くことができる，である。

CALL1 Handbook（食マネジメント学部 , 2022）には，さらに詳しく授業内容と計画が明記され，ICT スキル，すなわち，タイピング練習，MS Word や PowerPoint の使用方法，Word ファイルやテキストファイルから Word テンプレートに文字を移行する方法，自身の音声を録音した後 mp3 形式で保存し添付する方法などだけなく，大学生として知っておくべき知識・技能面として，Essay Writing の要点，参考文献の記載方法，箇条書きによるスライド作成方法，箇条書きの注意点（例，名詞句や動詞句に統一）等も含め，多岐にわたる内容が含まれている。

本授業における 4 技能については，リスニングとスピーキングの 2 領域の力をつけることに重点が置かれているものの，発音に関する内容も多く扱われている。使用教科書は，音声変化やプロソディーの強化を図る『Listening Steps―英語の音を鍛えるリスニング・ステップ　1 語からパッセージへ―』（米山・Wells，2017）である。最終課題としては, 企業の SWOT 分析のプレゼンテーションやオンラインでの自主学習教材（Gyuto-e）[2] が課されている。

授業形態としては，15 週中の Week 5-7，Week 10-12，そして Week 15 の全 7 コマは対面授業ではなくメディア授業となっている。なお，ここで言うメディア授業とは，ライブ配信型授業ならびにオンデマンド型授業を指している。どのようなメディア授業を行うかは教員の裁量にある程度任されている。これは，各教員が担当するクラスの受講生の希望や英語力の実態に合わせて英語教育を行えるようにするためである。

2.2　授業実践

2022 年度春学期の CALL1 の対象者は, 食マネジメント学部 1 回生 2 クラスの受講生 46 名である。内訳は, 中級（IM: Intermediate）1 クラス（受講生 23 名）と準中級（PI: Pre-Intermediate）1 クラス（受講生 23 名）である。Week 15 の 1 コマ（90 分）のメディア授業を除いた，メディア授業 6 コマの教育内容を決定するにあたり，筆者は個別発音指導をしようと考え，事前にアンケートを行った。その結果，今までに発音指導を受けたことがなく，かつ受講してみたいという学生の希望が少なからずあり，小グループでの個別発音指導ならびに全体発音指導を行うことを決定した。

まず，個別発音指導は，CALL1 の授業開始時に行ったミニマルペア（ひとつの音素の違いによって意味が区別される単語のペア）の聞き分けテストの結果から，正答率が低かった母音と子音を選択したリストをもとに指導を行った。具体的に述べると，thought/sought, berry/very, see/she, seat/sit, cup/cap, play/prey など 20 の組み合わせの単語を練習題材として用いた。

次に，全体発音指導では，洋楽ならびに音素バランス・パッセージ（英語の音素をバランスよく含むパッセージ）である Stella [3] を使用した。洋楽は毎回クラスで 5 分程度練習を行った。音素バランス・パッセージである Stella は，見本として，著しく発音が上達した前年度の受講生 1 人の事前と事後の音声を聞かせ，どのような違いがあったかを小グループで話し合い活動を行わせ，その後クラス全体で確認した。教員側から 12 のポイントを説明し，練習に取り組ませた。以下では，個別指導と全体指導の概略を述べる。

2.2.1　個別指導の実践

筆者は，学生のプレゼンテーションを見ていて，学生が発音に意識を向けることでプレゼンテーションが格段によくなると感じることが多くあり，CALL の授業内で発音指導をすることを考えた。発音に関し，一度は個別で指導を受けることが近道であると考え，学生にアンケートを取り，6 回のメディア授業の 4 回を使用し，実施するに至った。Week 6 と 7 の 2 回は，クラス（約 20 名）を 3 分割し（約 7 名ずつ），30 分ずつの対面方式にした。まず，教員が，ミニマルペアの発音の調音方法を歯の模型を利用し（図 1），全体に向けて講義を行った。その後学生が，個別で教員の前でマスクを取り，教員から発音のチェックを受けた。その際，その音を発話させるように，口の形や舌の位置，口の開け方などついて指摘をした（松坂, 2021 参照）。また教員自ら発音し，何度も見本を見させるようにした。また，学生が発した音を再現し，正しい音との違いを即時フィードバックし，合格点を与えるまで何度もやり直しをさせた（図 2）。

図 1　歯の模型を利用した調音方法指導の例

図 2　個別発音指導風景

Week 10 と 11 の 2 回は，前半終了後の学生からの 30 分では短かったとのコメントを受け，クラスを 2 分割し（約 10 名ずつ），45 分ずつでミニマルペアの続きと，Stella を利用したプロソディーの個別指導を行った。図 3 に示すように，コロナの感染予防の面を考慮し，学生と教員の間にアクリル板を配置し，教員は透明のフェイスシールドをつけ，学生に口元が見えるようにした。学生には教員の前に来たときにだけマスクを外して発話させた。これにより，学生の口の形も見えるようになり，正確に発音指導を行える状況を作った。

図 3　コロナ禍での発音指導の様子

2.2.2　全体指導の実践

個別指導をしたメディア授業内ではなく，対面授業内に発音に対する全体指導を行った。学生に話し合い活動をさせ，個別での学びをグループからクラス全体へと共有することでグループ･ダイナミックスの効果を期待した。まず，「何故, 洋楽は歌いづらいのか」という問いかけから始めた。その理由として, ①日英の音の数え方の違い（例として，ミルクは３モーラ，milk は１シラブル；成田，2013 参照），②言語間差の話（日本語と英語は文字，音声，文法などがお互いかけ離れており，双方の母語話者にとってお互い習得しづらい言語であるとされていること；白井，2008；江利川，2022 参照），③日本語と英語の音の比較（音の数え方，アクセントのつけかた，周波数の違い），そして④英語のアクセントは単語だけでなく文にもアクセントがあること，を説明した。

次に，言語間差がある言語を学習するときには，まず違いを認識した後に，体育のように身体を使い練習することが必要となる。その効果的な練習の一つとして，洋楽を取り入れた。クラスで洋楽を導入するにあたり，音楽が苦手な学生もいるため，その必要性を納得してから取り組んでもらう必要があった。そこで，少人数のグループになり，英語学習において洋楽を用いることのメリットとデメリットをできるだけ挙げさせ，クラス全体で共有するためにホワイトボードに全て書き出し，学生にカテゴリーに分類させた。その結果，語彙習得面，文法面，動機づけ面，学習方略面とカテゴリーは多岐にわたった。各カテゴリーのメリットとデメリットについて，教員が理論的な補足を行った。また，デメリットのカテゴリーに対しては学生に対処法も考えさせた。例えば，音痴な学生はどうするのかに対しては，音は無視してリズムだけに焦点を当てるといった対処法が提案された。このように学生に納得してもらったうえで，洋楽を取り入れることで，恥ずかしいから歌わないといったことを防ぐことになったと考えられる。音素バランス・パッセージの Stella に関しても，ミニマルペアの英単語で行ったように，教員の前に来て，１人１文ずつ発音をさせ，プロソディー指導（アクセント，リズム，イントネーション）を行った。

2.2.3　プロソディー指導の実践

学生たちは，音素バランス・パッセージである Stella に関して，食マネジメント学部専任教員作成のパワーポイントでまとめられたプロソディー関連の 12 項目の１つのポイントである「内容語と機能語に分け，内容語は長く強く，機能語は短く弱く発音する」のが通常であることを学んでいた。概して，学生の発音には学習の事前・事後で Stella を音読する時間が短くなるなどの変化が見られたが, ここでは一例として, Praat（Boersma & Weenink, 2022）を使って準中級（PI）の学生１人の事前・事後の結果を挙げる。Stella のパッセージの冒頭部分 ‘Please call Stella. Ask her to bring these things with her from the store.’ と発話している事前・事後の Praat の波形とピッチである（図 4）。上下段ともに選択範囲の ‘ask her to’ の発話であるが，事前では３単語がほぼ均一に発話され，事後では機能語である代名詞の her が事前に比べて，短く弱く発話されていて，選択範囲の持続時間（duration）も短くなっているのが分かる。

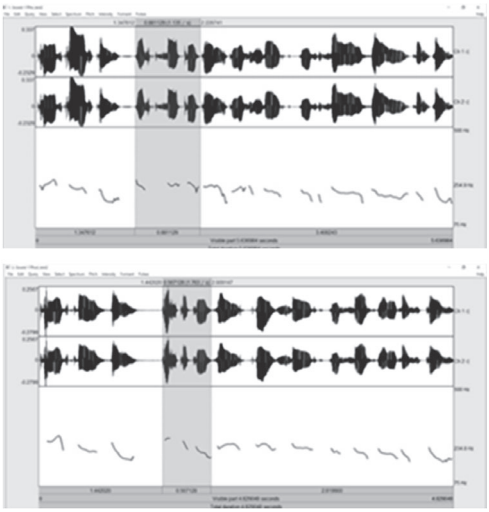

図４　Praat による音声分析結果（上段は事前，下段は事後の音声）

3　本授業に対する質問紙調査

3.1　質問紙の概要

メディア授業の形態を利用した教員裁量の少人数による指導の後，学生が個別発音指導に関してどのように感じていたのかを調査する目的でアンケートを実施した。46 名中 38 名（有効回答率 83%）が回答した（内訳は，中級クラス 17 名，準中級クラス 21 名）。メディア授業を受講している学生がスマートフォンからも回答しやすいように Google Forms を用いた。

アンケートは，学生にとっての発音に関する意識を尋ねる 6 項目（5 件法），今回の個別指導に対する感想を求める 3 項目（自由記述式），学生にとって発音の難しさを問う 1 項目（多肢選択式，複数回答可）の計 10 項目であった。

3.2　質問紙への回答結果

3.2.1　選択式質問項目への回答結果

選択式質問項目は，5 件法のリッカート式の 6 項目と多岐選択式の 1 項目からなる全 7 項目であった。まず，5 件法のリッカート式の項目 1 から 5，および 7 について述べる。項目 1 の「自分の発音について気にしている」（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）では，4 あるいは 5 に回答した学生が 24 名（63.2%）であり，発音を意識している学生が過半数を占めた（図 5）。項目 2 の「自分の発音を良くしたいと思っている」では，4 あるいは 5 に回答した学生が 35 名（92.1%）と大半を占め，発音に関心があることが分かった（図 6）。項目 3 の「話す内容の方が発音より大切だと思っている」では，中立的な回答である 3 が 20 名（52.6%）と最も多く，発音の方が大切と思っている学生（4 と 5 の合算）が 13 名（34.2%）であった（図 7）。項目 4 の「今回の個別の発音指導は今後の自分が発音する際に役立つと思う」に対して，4 あるいは 5 に回答した学生が 29 名（76.3%）と，個別発音指導に対する評価が高いことが分かった（図 8）。項目 7 の「今回の講義は私には役に立たなかった」（逆転項目）に対しては，1 と 2 の否定的な回答が 27 名（71.1%）を占めたので，学生にとっては今回の講義が役に立っていたことが分かった（図 9）。最後に，項目 9 の「こういった発音に対する講義をもっと受けたい」については，4 あるいは 5 に回答した学生は 32 人（84.2%）であったので，本講義への関心の高さがうかがえた（図 10）。

以上のことから，メディア授業の枠組みを利用して行った今回の個別発音指導は，多くの学生にとっては初めての経験ではあったが，発音の意識を高め，正しい発音の重要性に気づく良い機会であったと言える。

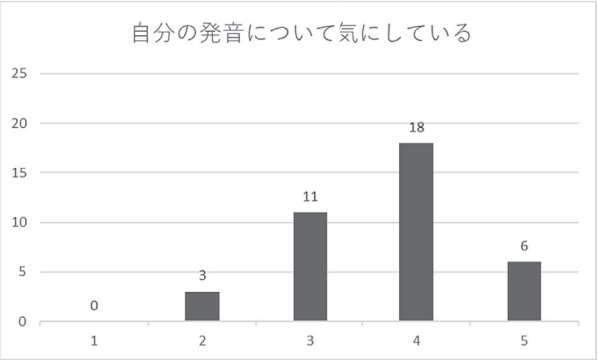

図 5 「1. 発音を気にしている」への回答

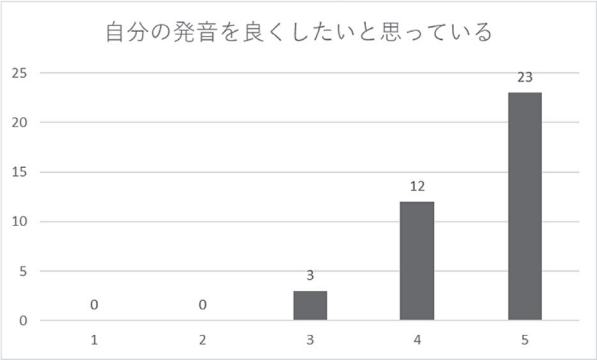

図 6 「2. 自分の発音を良くしたい」への回答

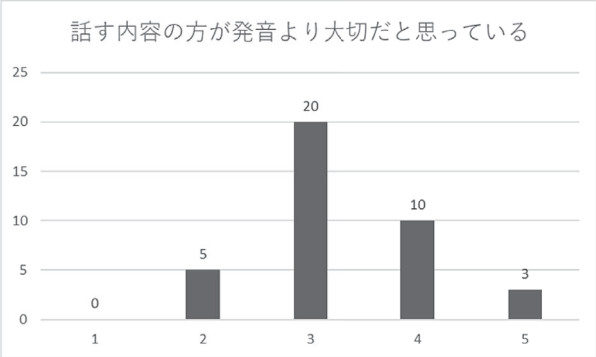

図７　「3. 内容の方が大切」への回答

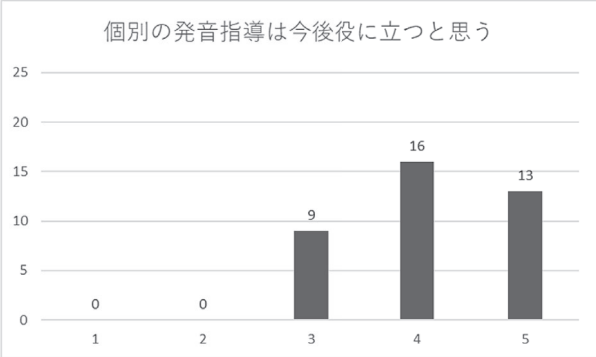

図８　「4. 発音指導は役に立つ」への回答

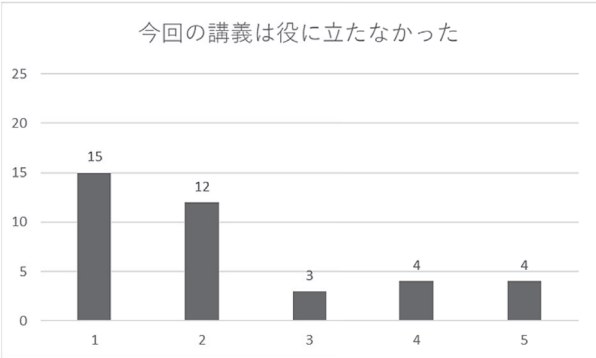

図９　「7. 発音指導は役に立たない」の結果

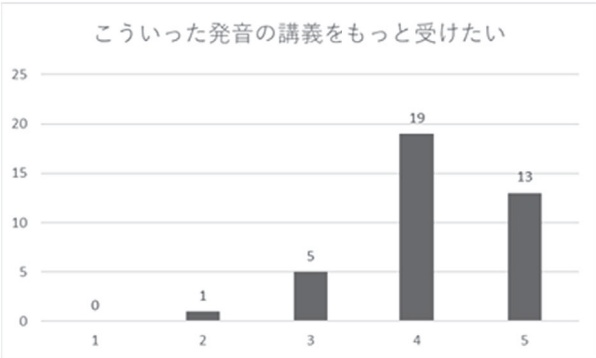

図 10　「9. もっと発音指導を受けたい」の結果

次に，多岐選択式（複数回答可）の質問項目について述べる。項目６の「自分にとって発音が難しいと感じるものにチェックをいれなさい」に関しては，「単語の発音（スペルをみてもどう発音していいか分からない）」と「文の中で，内容語と機能語で強さ長さの調整（英語のリズム）」を 21 名（55.3%）の学生がそれぞれ選択した。これは，準中級（PI）の学生が過半数であったことが考えられる。次いで，「単語のアクセントの位置」が 20 名（52.6%），「単語の発音のルールが分からない（例：cut/cute の u の発音の仕方が変わる，spoon/book の oo の発音が違うなど）が 18 名（47.4%），「文の中で，単語と単語を繋げて発音するときに発音しないところ（例：hot dog の t は発音しないなど）」が 16 名（31.6%），「文の中で単語と単語を繋げて発音するところ（例：in an hour インナンナワ）」が 15 名（39.5%），「文の中で，単語と単語が繋がって別の発音になるところ（例：Would you がウッジュなど）」を 12 名（31.6%）の学生が選択した（図 11）。

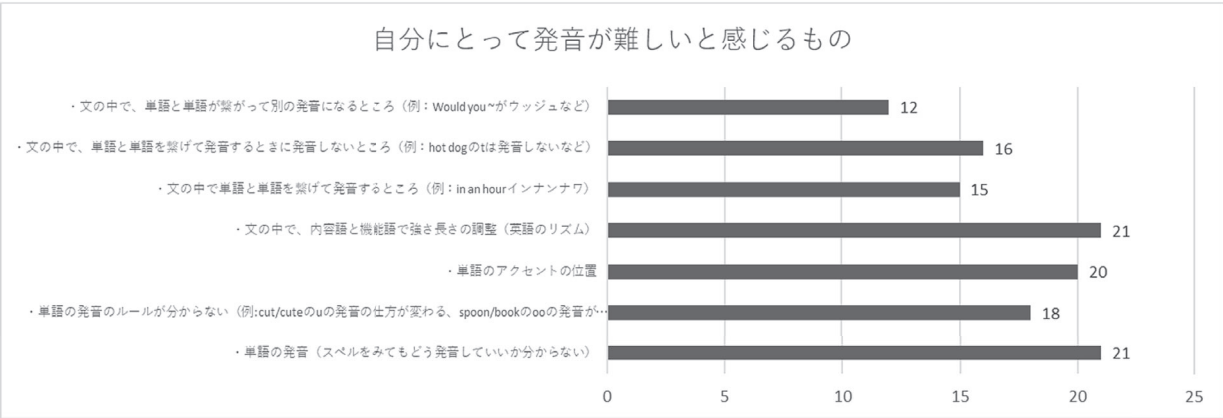

図 11　「6. 発音が難しいと感じるもの」への回答

3.2.2　自由記述式質問項目への回答結果

自由記述式質問項目は，項目 5「今回の小グループでの発音指導について感じたことをなんでもよいので書いてください」，項目 8「講義を受けて今後どういったところに気をつけようと思うか」，そして項目 10「発音学習についてのリクエストなど，他に何かあれば自由に書きなさい」の 3 項目であった。

まず，項目 5「今回の小グループでの発音指導について感じたことをなんでもよいので書いてください」には，全部で 35 名の学生が自由記述に回答した。そこで，回答内容を詳細に読み，KJ 法（川喜田，1970）でカテゴリー化をした。今までになかった授業への感想と，方略や気づきといった自己客観視ができている回答が見られた。その中から代表的なものを以下に挙げる。

＜今までになかった授業への感想＞

・今回のような機会がない限り，先生が個別で指導してくださる機会は無かったので，とても貴重な時間で，とてもためになった。
・少人数で授業を受けるのが新鮮でとても楽しかったです。
・小グループなので成長できた気がしました。
・ひとりひとり見てくれるのが良かった。人も少なかったし，恥ずかしさが少なかった。
・発音練習をして自分の発音を教えてもらいながらできたことが良かったです。

＜気づきや自己客観視＞

・自分が考えていたよりも細かい発音の決まりがたくさんあった。
・th の発音が難しかった。
・発音できていると思っている単語の発音が間違っていることに驚いた。意識して発音することの重要性を理解した。
・基本的なことができていないと思った。
・今までなんとなく発音していたが，意識して発音したら難しかった。
・発音は少しの口の開け方や息の出し方などで変わってくることがわかった。

以上の回答から，学生にとって，個別発音指導は，今まで意識をしてこなかった発音に注意を向け，正しい発音をすることに挑戦し，気づきを得たり，自己客観視するいい機会であったと考えられる。次に，35 件の上記コメントに対して，KH Coder 3（樋口，2020）を使用し，テキストマイニングを行った。総抽出語数は 624 語，名詞・動詞・形容詞に相当する共起頻度が 1 以上の上位 60 語に対してテキストマイニングを行った（図 12）。共起ネットワークのつながりの強い語のグループからも学生のコメントと同様の結果が得られた。

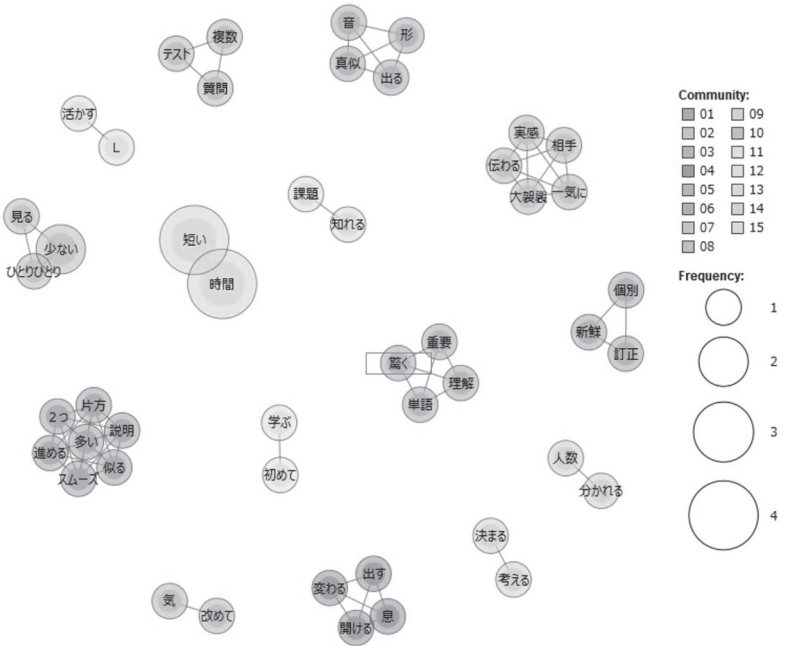

図 12 「小グループでの発音指導について」の共起ネットワーク

次に，項目 8「講義を受けて今後どういったところに気をつけようと思うか」に対してもテキストマイニングを行った。回答数は 31 件であり，総抽出語は 381 語，共起頻度が 1 以上の上位 60 語を表示した結果の共起ネットワーク図が得られた（図 13）。センター部分に「意識」ということばがあるがコンコーダンスで確認したところ，「単語と単語のつなげるところを意識しようと思う」，「特に前置詞や冠詞の発音をつなげることを今まで意識しなかった」，「舌を丸めて発音など細かいところを意識しようと思う」や「スピーキングを練習するときに意識したい」等の記述が見られた。よって，教員の授業のねらいどおりに，学生たちは発音を意識するようになり，正の波及効果があったと言える。

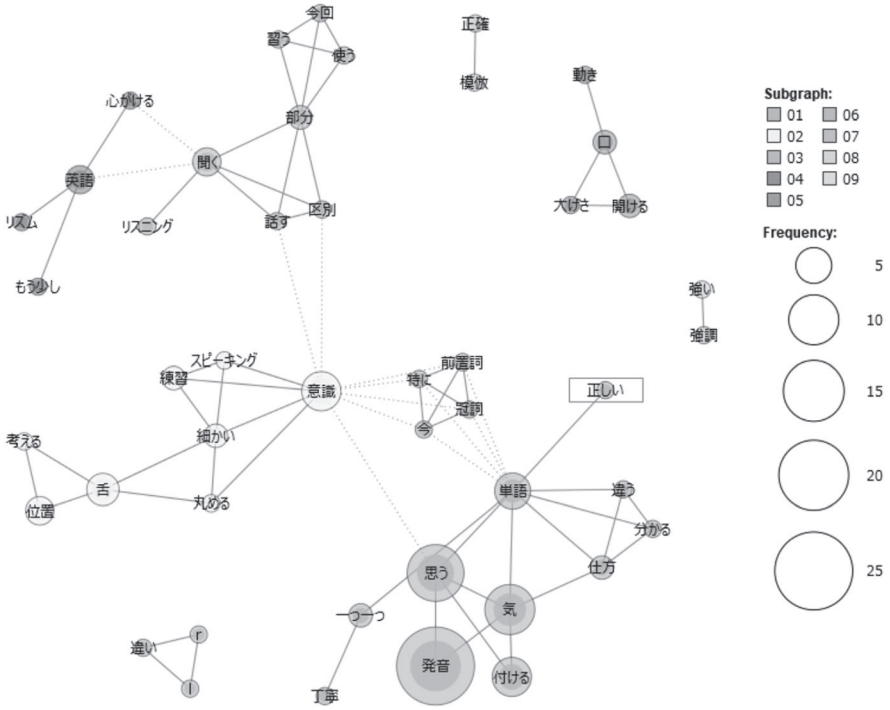

図 13 「今後どういったところに気を付けようと思うか」の共起ネットワーク

最後に，項目 10「発音学習についてのリクエストなど，他に何かあれば自由に書きなさい」については，5 名の学生が回答していた。「またこういう機会があると嬉しいです」や「もっと個別の発音学習の授業を増やして欲しい」といった感想があり，全対面の授業形態だけではなく CALL のような授業の目的に合致すれば，個別に指導できるような授業形態も今後も残すべきだと言えるのはないだろうか。

4　おわりに

外国語を学ぶということにおいて発音が重要な意味を持つことは言うまでもない。しかしながら，日本の英語教育では音声教育が軽視されてきたように思われる。その要因のひとつとしては，指導者である教員自身が発音指導を受けたことがない可能性が考えられる。もしくは，教員が発音をそれほど自分では意識せずに海外に滞在するなどして自然に身につけたため，英語のインプットを増やすなどすれば発音は自ずと習得できると思い，あまり指導の必要性を感じていないのかもしれない。しかし，今後は日本という EFL 環境下にある日本人英語学習者にとって音声教育は不可欠になっていくであろう。なぜならば，相手意識を持つことの第一歩は自分自身の発音の明瞭性（intelligibility）を高めることだからである。

本実践において，音声教育を受けたことのない学生が個別の発音指導を受け，その個別指導に対し肯定的な感想を持ち，さらに今後発音を意識して英語を話したいという意思を持ったことには意義があると言える。さらには，教員として，学生が自らの発音に意識を向け，正しい調音方法やプロソディーの仕組みを学ぶだけではなく，こうして練習をして身につけた発音は一生ものであることを学生にしっかりと伝えていきたい。

本実践における学生の主体的な学びを促すポイントは，話し合い活動である協同学習を導入し，個からクラス全体へ知識を共有すること，そして，学生がイメージできる達成可能な目標を提示し，教員が学生個人にフィードバックを与え，発音ができたら評価し褒めることであった。このような一連の指導により，学生の本授業に対する満足度が上がったのではないかと考える。一例として，なかなか発音で合格をもらえなかった学生が，クラスメートが発音指導されているのを見ながらその傍らで個人で練習をし，やっと合格をもらえたときに見せた達成感のある朗らかな笑みは忘れることができない。コロナ禍の接触制限がある状況下において，さまざまな配慮をしながら，個別発音指導に踏み切れたことは，教員に教育内容がある程度委ねられていたメディア授業という枠組みによると考える。今回の授業実践に対する学生の反応を踏まえ，今後もさまざまな教育場面で何らかの形で個別の発音指導を続けていきたい。

謝辞

本実践研究に関わった食マネジメント学部の 1 回生 2 クラス（CALL 1）の協力に感謝する。また，食マネジメント学部の大和田和治教授に発音指導に関する教授用のパワーポイント，資料，発音矯正のための歯形模型の教材等の共有を頂いたことに心から感謝の意を表する。なお，今回の実践は 2022 年度 R2030 推進のためのグラスルーツ実践支援制度のプロジェクト（「授業内でできる英語発音指導法の実践と開発 ―個に応じた指導で伝わる発音へ―」）の助成を受けたものである。

注

1）本稿の一部は，立命館大学言語教育センター主催の FD セミナー、2021 年 7 月 28 日「コロナ禍で得た経験を授業に生かす取り組み」（発表者：竹田里香），ならびに 2022 年 7 月 27 日「CALL の枠組みを活かした学生の主体的参加を促す取り組み」（発表者：渡辺彰子・竹田里香）を大幅に加筆修正したものである。

2）Gyuto-e は，e-learning の英語学習プログラムである。詳しくは，https://gyuto-e.jp/ を参照。

3）詳しくは，http://accent.gmu.edu/browse_language.php?function=detail&speakerid=145/ を参照。

参照文献

江利川春雄（2022）『英語教育論争史』 講談社選書メチエ
川喜田二郎（1970）『続・発想法 KJ 法の展開と応用』 中公新書
食マネジメント学部（2022）『CALL1 Handbook』 Ritsumeikan University.
食マネジメント学部（2022）『GM Handbook』 Ritsumeikan University.
食マネジメント学部（2022）『Pronunciation Handbook』 Ritsumeikan University.
白井恭弘（2008）『外国語学習の科学―第 2 言語習得論とは何か』岩波新書
成田一（2013）『日本人に相応しい英語教育―文科行政に振り回されず生徒に責任を持とう』松柏社
樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―（第 2 版）』 ナカニシヤ出版
松坂ヒロシ（2021）『歯型と絵で教える英語発音―発音をはじめて教える人へ―』 開拓社
米山明日香・Lindsay Wells（2017）『Listening Steps―英語の音を鍛えるリスニング・ステップ　1 語からパッセージへ―』 金星堂書店
Boersma, Paul & Weenink, David (2022). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.3.03, retrieved 17 December 2022 from http://www.praat.org/
Pond, C. (2022). *Writing handbook*. Ritsumeikan University.

Appendix A：音素バランス・パッセージ Stella

Please call Stella. Ask her to bring these things with her from the store. Six spoons of fresh snow peas, five thick slabs of blue cheese, and maybe a snack for her brother Bob. We also need a small plastic snake and a big toy frog for the kids. She can scoop these things into the three red bags, and we will meet her Wednesday at the train station.

Appendix B：アンケート項目

1. 自分の発音について気にしている（5 件法）
2. 自分の発音を良くしたいと思っている（5 件法）
3. 話す内容の方が発音より大切だと思っている（5 件法）
4. 今回の個別の発音指導は今後の自分が発音する際に役立つと思う（5 件法）
5. 今回の小グループでの発音指導について感じたことをなんでもよいので書いてください（自由記述）
6. 自分にとって発音が難しいと感じるものにチェックを入れてください（複数回答可）
   - ・単語の発音（スペルをみてもどう発音していいか分からない）
   - ・単語の発音のルールが分からない（例：cut/cute の u の発音の仕方が変わる、spoon/book の oo の発音が違うなど）
   - ・単語のアクセントの位置
   - ・文の中で、内容語と機能語で強さ長さの調整（英語のリズム）
   - ・文の中で、単語と単語を繋げて発音するときに発音しないところ（例：hot dog の t は発音しないなど）
   - ・文の中で、単語と単語が繋がって別の発音になるところ（例：Would you ～がウッジュなど）
7. 今回の講義は私には役に立たなかった（5 件法）（逆転項目）
8. 講義を受けて今後どういったところに気をつけようと思うか（自由記述）
9. こういった発音に対する講義をもっと受けたい（自由記述）
10. 発音学習についてのリクエストなど、他に何かあれば自由に書きなさい（自由記述）

（たけだ　りか　外国語嘱託講師）

Classroom Initiatives to Boost Students' Autonomous Learning Pronunciation Instruction in CALL Classes

TAKEDA Rika*

Abstract

This paper reports on the practical implementation of a class utilizing the framework of the media class (live-delivered and on-demand) for the spring semesters of the 2021 and 2022 academic year in CALL 1. This paper focuses on class activities to promote students' autonomous learning in pronunciation individual instruction and whole-class teaching. For the individual instruction, the results of a post-class questionnaire showed that the students appreciated the instruction, which they had never experienced before, and became more conscious of their pronunciation. On the other hand, in the whole-class instruction, students shared their knowledge from "individual to group to the whole class" mainly through discussion activities. Furthermore, the teacher presented achievable goals that the students could visualize. In this way, it is thought that students' autonomy was promoted. In addition, the teachers' individualized instruction, feedback, and praise for achievement helped to keep the students motivated.

Key words：pronunciation instruction, collaborative discussion, individual instruction, feedback

* Full-time Foreign Language Lecturer, Ritsumeikan University